



小出宝光院傍にある下荒井の旧肝煎荒井家の供養碑ともみの御神木（これにのろい釘が打ってある）

のは、開拓を進めた沿岸の人々である。しかし荒れ川をとり静めることは容易でない。二日町辺から真宮村辺の東部で川幅が最も広く、五〇〇〜六〇〇メートルにも達する。その大半は平常は河原で、中の流れの幾筋かを渡ればよいし、大雨があれば、たちどころに河原を濁流が押し埋めてくるから、古くから舟の渡し場に通っていた。

貞享二年の書上げには、打舟二つ結合して一艘で往來し、その舟の破損した時舟賃その他のことが詳細にのせてある。重複をさけて詳細には述べないが、そのための各部落の負担額があった。輪中・中州に住む村々の最も緊要な条件であったことは勿論である。橋の架せられた経過は他の項で詳述する。

3、大川の漁業 寛文五年の書上げに、四月中旬から鱒がのぼるので、網やとめをつくり、この網にも四手網、流網、いくくり船でさ



小出宝光院の赤鬼（右）青鬼（左）